

大学および学部への愛着の規定要因

金 政芸

1 はじめに

大学は多くの人によって支えられている。大学を支える人の多くを占めるのが、卒業生である。大学生は大学を巣立っていき、社会で活躍していくが、卒業してからも母校のために何らかのサポートをする卒業生も少なくない。卒業生は、大学のために種々の援助をしたり、自分の子弟を母校に入学させようとしたりする。こういった好循環が成立しているとき、大学は持続的に活動を続け、発展していくことができる。

卒業してからも母校のためにサポートをおこなう卒業生はどのような人だろうか。それは、母校への強い愛着をもつ人である。4年制大学卒業生を対象にしておこなわれたベネッセ教育研究開発センターの調査では、母校への愛着が高い人ほど、母校へ関心をもち続け、より積極的に母校と関わろうとするといった結果が示されている（ベネッセ教育開発センター 2010）。大学を支えようとする気持ちは、こうした母校への愛着から生まれるものである。

本稿では、このような大学への愛着が何によって育まれるかを明らかにする。同時に、学部への愛着がどのように形成されるかについても分析していく。なぜなら、学部への愛着が大学への愛着につながると考えられるからである。大学および学部への愛着を同時に分析していくことで、2つの愛着の形成原理の共通点と差異点を把握することができるだけでなく、どの要因が学部への愛着を介して大学への愛着の向上につながるかも確認できるだろう。

学校への愛着について実証的な分析をおこなった日本の研究としては、高校生の愛校心の形成要因の分析をおこなった江口貴康（2003）があげられる。彼の研究では、部活動内の先輩や後輩から受ける影響の強さや、先生から受ける影響の強さが高校への愛校心を高め、また、友人の多さが高校への愛校心を高めるといった知見が得られた。こうした知見から考えると、大学や学部の内部で形成される豊かな人間関係が、学部および学科への愛着を規定する重要な要因であることが予想できる。本稿では、こうした学内の人間関係にとどまらず、大学入学前の要因と、授業にかかわる要因や課外活動など大学生活全般にかかわる要因が、大学および学部への愛着とどのように関連するかを包括的に分析していく。

なお、分析には2012年の卒業式（3月20日）に実施された第4回社会学部卒業時調査のデータを用いる。

2 大学への愛着と学部への愛着

大学への愛着の指標としては、まず「同志社大学には愛着がある方だ」という質問項目

を用いる。同時に、「同志社大学に来てよかった」かどうかをたずねた項目も指標として用いる。大学への愛着が強ければ、当然ながらその大学に来てよかったと思うようになるだろう。こうしたことから考えると、この項目も大学への愛着の指標に十分なり得ることがわかる。この2項目間の相関も0.635と非常に高い値を示している。この2項目の値を合計して2で割ったものを「大学への愛着」としよう¹。

学部への愛着を直接たずねた項目はなかったが、「社会学部に来てよかった」という項目はあった。大学への愛着を直接たずねた項目と、その大学に来てよかったかをたずねた項目間の相関が非常に高かったことから、「社会学部に来てよかった」という項目を「学部への愛着」をあらわすものと見なしてもいいことがわかる。

表 1 大学への愛着と学部への愛着を構成する項目の度数分布表

		そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない	合計	<i>n</i>
大学への 愛着	同志社大学には愛着がある方だ	57.4	30.2	8.5	3.9	100.0	331
	同志社大学に進学してよかった	72.8	23.6	2.7	0.9	100.0	331
学部への 愛着	社会学部に来てよかった	70.1	23.3	4.8	1.8	100.0	331

さて、大学および学部への愛着の規定要因について分析をおこなう前に、まずこの2つの愛着の間にどのような関連があるかを確認しておこう。

表 2 大学への愛着と学部への愛着の相関

	大学への愛着	
	相関係数	<i>n</i>
学部への愛着	0.654 ***	330

 $p < 0.001$

表 2 は、大学への愛着と学部への愛着の相関を示したものである。表から、大学への愛着と学部への愛着の間に高い正の相関があることがわかる。これは、学部への愛着が大学への愛着につながることを示していると解釈できるだろう。一般的に、自分の所属する共同体への愛着が高まると、その共同体を包含するより大きい規模の共同体への愛着も同時に高まっていく。たとえば、真鍋一史 (1999) の研究では次のような結果が示されている。今住んでいる地区への愛着は市区町村への愛着と高い相関をもつ。また、市区町村への愛着は都道府県への愛着とも高い相関をもつ。同様に、都道府県への愛着は日本への愛着と、日本への愛着はアジアへの愛着と、高い相関をもつ。こういった相関関係は、今住んでいる地域への愛着が市区町村への愛着につながり、さらに都道府県への愛着に、日本への、

¹ 合計した値を2で割ったのは、後述する「学部への愛着」と同じ範囲の値をとる尺度にするためである。

アジアへの愛着にまでつながっていくことをあらわしている。学部という小さな共同体への愛着は、それを包含する共同体である大学という共同体への愛着につながるといえよう。

3 入学前の要因と大学および学部への愛着

3.1 性別と高校所在地

では、性別と高校の所在地が、大学および学部への愛着とどのように関係しているかから確認しよう。

表 3 性別と高校所在地ごとにみた大学・学部への愛着の平均

		大学への愛着			学部への愛着		
		平均	<i>n</i>	<i>F</i> 値	平均	<i>n</i>	<i>F</i> 値
性別	男	3.497	152	1.827	3.543	153	3.526
	女	3.590	178		3.680	178	
高校所在地	京都	3.742	66	4.343 *	3.712	66	1.119
	京都を除く近畿地方	3.533	167		3.631	168	
	その他の地域	3.457	92		3.554	92	
全体		3.547	330		3.616	331	

* <0.05

表 3 は、性別と高校所在地の別にみた大学および学部への愛着の平均である。表から、性別による差はどちらの愛着においても見られないことがわかる。高校所在地においては、京都、京都を除く近畿地方、その他の地域の順に大学への愛着の平均が低くなっていく。卒業した高校が、同志社大学がある京都から遠いところにあるほど、大学への愛着は弱まっていくようである。

3.2 入試

大学の入試にかかわる要因である入試形態、志望順位、現役・浪人といったものは、大学および学部への愛着にどのような影響を与えるだろうか。調査票では、入試形態をたずねた項目に「一般試験やセンター試験を利用する入試」「推薦入試（指定校・公募や AO 入試）」「内部校からの推薦入試」「外国人留学生入試」「その他」の選択肢が設けられていた。このなかで「外国人留学生入試」と「その他」は、該当する人数が少なかったため、分析から除くことにする。志望順位をたずねた項目の選択肢には、「第 1 志望」「第 1 志望以外（国公立志望）」「第 1 志望以外（私立地大志望）」があったが、後者の 2 つをまとめて「第 1 志望以外」とする。現役・浪人についても「現役」「浪人」のほかに、「その他（編入、社会人など）」があったが、選択した人が少なかったため、分析から除く。

表 4 入試形態、志望順位、現役・浪人ごとにみた大学・学部への愛着の平均

		大学への愛着			学部への愛着		
		平均	<i>n</i>	<i>F</i> 値	平均	<i>n</i>	<i>F</i> 値
入試形態	一般・センター	3.439	222	11.361 ***	3.547	223	3.468 *
	推薦	3.778	27		3.630	27	
	内部推薦	3.813	64		3.797	64	
志望順位	第1志望	3.616	224	8.724 **	3.671	225	4.815 *
	第1志望以外	3.401	106		3.500	106	
現役・浪人	現役	3.589	226	4.586 *	3.626	227	0.666
	浪人	3.421	88		3.557	88	
全体		3.547	330		3.616	331	

* <0.05 ** <0.01 *** <0.001

表 4 は、入試形態、志望順位、現役・浪人の別にみた大学および学部への愛着の平均である。入試形態は、どちらの愛着においても一般・センター、推薦、内部推薦の順に平均が高くなっていく。また、志望順位は、両方の愛着において第 1 志望のほうが高い平均をもつ。現役・浪人別の平均の差は、学部への愛着においてのみ見られ、現役のほうが浪人より平均が高くなっている。分析から、学部への愛着は入試形態と志望順位と、大学への愛着は入試形態、志望順位、現役・浪人と関連することがわかった。

しかし、この分析だけでは、入試にかかわる要因のなかで、大学および学部への愛着と直接関連するものが何かについては把握できない。推薦や内部推薦を通して入学した人のほとんどが、同志社大学を第 1 志望にする現役生であるからである。このことについては、後におこなう重回帰分析から確認しよう。

4 大学生活と大学および学部への愛着

4.1 学科と在学年数

ここからは、大学生活にかかわる要因と大学および学部への愛着との関係について分析していく。まず、学科と在学年数が大学および学部への愛着にどのような関連をもつか確認しよう。

表 5 学科と在学年数ごとにみた大学・学部への愛着の平均

	大学への愛着			学部への愛着			
	平均	<i>n</i>	<i>F</i> 値	平均	<i>n</i>	<i>F</i> 値	
学科	社会学	3.531	81	0.325	3.642	81	0.948
	社会福祉学	3.506	87		3.644	87	
	メディア学	3.551	69		3.594	69	
	産業関係学	3.625	56		3.561	57	
	教育文化学	3.554	37		3.622	37	
在学年数	4年	3.573	281	0.912	3.666	281	13.401 ***
	5年以上	3.408	38		3.256	39	
全体	3.547	330		3.616	331		

*** <0.001

表 5 は、学科と在学年数ごとにみた大学および学部への愛着の平均である。学科は、どちらの愛着とも関連していない。在学年数においては、5年以上の人より4年の人が強い学部への愛着をもつ傾向が見られている。一般的に、ある共同体に所属する期間が長いほどその共同体への愛着も高まりやすいといわれるが、学部への愛着は逆の傾向にあるようである。同志社大学は4年制大学であるため、多くの学生は4年で卒業しようとする。卒業に5年以上かかった人のなかには、卒業に必要な単位が取れなかったために留年した人が多い。学部の授業で単位が取れなかったりして留年した人は、学部に対して少々恨みのような感情を抱くかもしれない。卒業に5年以上かかった人のなかには、このような感情をもつ人が多いために、こういった傾向が見られたのではないだろうか。

4.2 授業

次に、授業にかかわる諸要因を、授業への取り組みと授業によって得られたものに分け、大学および学部への愛着との関連を分析していく。

(1) 授業への取り組み

授業へのさまざまな取り組みを示す項目としては、「授業内容について教員に質問する」「授業中のディスカッションに参加する」「ゼミの発表のために時間をかけて準備する」「卒業論文の作成を一生懸命がんばった」「期末テストやレポートの準備をきちんとする」「夢中になって受けた授業がある」「授業に遅刻や欠席をする」という項目を用いる。筆者は以前、授業への取り組みに関する項目から、主成分分析の結果にもとづいて「授業内の積極的参加」と「授業外の努力」という尺度を作成したことがある（金政芸 2010）。今回もこれらの項目で主成分分析をおこない、同様の尺度が抽出されるか確認してみよう。

表 6 授業への取り組みの主成分分析

	I	II	III
授業内容について教員に質問する	0.867	0.073	0.018
授業中のディスカッションに参加する	0.832	0.175	0.000
夢中になって受けた授業がある	0.646	0.295	-0.007
卒業論文の作成を一生懸命がんばった	0.075	0.894	0.069
ゼミ発表のために時間をかけて準備する	0.208	0.822	-0.027
期末テストやレポートの準備をきちんとする	0.372	0.652	-0.249
授業に遅刻や欠席をする	0.026	-0.042	0.985
固有値	2.048	2.025	1.038
寄与率	29.3	28.9	14.8
累積寄与率	29.3	58.2	73.0
<i>n</i>	337		

注) 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

表 6 の主成分分析の結果から、3 つの主成分が抽出され、その累積寄与率が 73.0%と高いことがわかる。第 1 主成分と高い負荷量をもつ項目には、「授業内容について教員に質問する」「授業中のディスカッションに参加する」「夢中になって受けた授業がある」があり、この主成分が授業内の積極的参加と同様のものであることがわかる。この 3 つの項目の値を合計したものを、本稿では「授業内の取り組み」とよぶことにする。また、第 2 主成分に「卒業論文の作成を一生懸命がんばった」「ゼミの発表のために時間をかけて準備する」「期末テストやレポートの準備をきちんとする」の 3 つの項目が高い負荷量をもつことから、この主成分が授業外の努力と同じような項目であることがわかる。本稿では、この 3 つの項目を合計したものを「授業外の取り組み」とする。第 3 主成分は、「授業に遅刻や欠席をする」だけが低い負荷量を示している。この項目は「遅刻・欠席頻度」にして分析に用いることにしよう。

表 7 授業への取り組みと大学・学部への愛着の相関

	大学への愛着		学部への愛着	
	相関係数	<i>n</i>	相関係数	<i>n</i>
授業内の取り組み	0.206 ***	322	0.151 **	323
授業外の取り組み	0.258 ***	323	0.208 ***	324
遅刻・欠席頻度	-0.101	325	-0.124 *	326

* <0.05 ** <0.01 *** <0.001

表 7 は、先の主成分分析の結果にもとづいて作成した 3 つの尺度と、大学および学部への愛着の相関をあらわしたものである。表から、授業内の取り組みと授業外の取り組みが、両方の愛着と正の相関をもつことがわかる。遅刻・欠席頻度は、学部への愛着においてのみ負の相関が見られている。授業時間の内外でおこなわれる取り組みと、大学および学部への愛着の間には正の関連があるのである。

(2) 授業によって得られたもの

大学生は授業のなかで何を得ているのか。大学生は、授業を通して専門的で実用的なスキルや論理的な思考力を向上させることができる。また、授業から得られた知識は、世の中に起きる多様な出来事を理解することを可能にしてくれる。そして、GPA も授業によって得られたものの1つである。すなわち授業からは、能力向上、物事への理解への深まり、GPA が得られるのである。これらの要因と大学および学部への愛着の関連を見てみよう。

調査票において、能力向上に関する項目には「根拠を示し簡潔に書く能力」「自分の考えや意見を人にわかりやすく伝える能力」「1つのものごとを複数の視点から考える能力」「文献や資料を読み解く能力」「必要な文献や統計資料を探すスキル」「数量的に分析する能力」「外国語のスキル」があった。これらの項目で主成分分析をおこなうと、第1主成分の寄与率が47.6%になる。各項目の値を合算したものを「能力向上」としよう。物事への理解の深まりに関する項目には、「社会のメカニズム」「政治のメカニズム」「経済のメカニズム」「哲学や思想」「人間の心理」「さまざまな文学作品」「美術や音楽などの芸術」「日本や世界の歴史」「異文化」「異性」「マイノリティ」への理解が深まったかどうかをたずねたものがあった。これらの項目でおこなった主成分分析では、第1主成分の寄与率が43.2%となる。これらすべての項目の値を合計したものを、「物事への理解の深まり」とする。GPA についてたずねた項目には、「1.49未満」「1.50～1.99」「2.00～2.49」「2.50～2.99」「3.00～3.49」「3.5以上」の選択肢が設けられていた。分析には、各カテゴリーの範囲の中央値を値にして用いることにする。

表 8 GPA・能力向上・物事への理解の深まりごとにみた大学・学部への愛着の平均²

		大学への愛着			学部への愛着		
		平均	n	F値	平均	n	F値
能力向上	高	3.731	119	12.746 ***	3.765	119	12.574 ***
	中	3.595	100		3.703	101	
	低	3.304	102		3.373	102	
物事への理解の深まり	高	3.712	106	5.413 **	3.745	106	3.087 *
	中	3.481	103		3.529	104	
	低	3.464	111		3.586	111	
GPA	3以上	3.604	101	1.366	3.693	101	4.493 *
	2～3未満	3.536	151		3.645	152	
	2未満	3.431	58		3.379	58	
全体		3.547	330		3.616	331	

*<0.05 **<0.01 ***<0.001

表 8 は、能力向上、物事への理解の深まり、GPA の値をそれぞれ 3 つのカテゴリーに分け、大学および学部への愛着の平均を見たものである。能力向上と物事への理解の深まり

² 「能力向上」と「理解の深まり」における高、中、低は、3つのカテゴリーの分布が同じ程度になるように分けたものである。

は、どちらも低、中、高の順に両方の愛着の平均が高くなっていく。このことから、能力向上と物事への理解の深まりが、大学および学部への愛着と正の関係にあることがわかる。GPA は、学部への愛着においてのみ正の関連が見られており、成績の良い人が強い学部への愛着をもつ傾向にあることがわかる。

4.3 課外活動

これまでの分析から、大学の授業が大学および学部への愛着と深く関連していることがわかった。では、課外活動に関してはどうだろうか。課外活動といっても多様な活動があるが、ここでは多くの大学生が経験する活動である部活やサークル活動、アルバイト、就職活動だけをとりあげて分析することにしよう。

表 9 課外活動の頻度と大学・学部への愛着の相関

	大学への愛着		学部への愛着	
	相関係数	<i>n</i>	相関係数	<i>n</i>
部活・サークル活動	0.097	323	0.063	324
アルバイト	0.035	323	0.076	324
就職活動	0.119 *	322	0.111 *	323

* <0.05

表 9 は、大学在学中の「部活・サークル活動」「アルバイト」「就職活動」の活動頻度をたずねた項目と大学および学部への愛着との相関を示したものである。部活・サークル活動とアルバイトの頻度は、どちらの愛着においても相関が見られなかったが、就職活動の頻度は両方の愛着と 0.1 程度の弱い正の相関をもつ。同志社大学の学生であることや社会学部の学生であることが、就職活動において何らかの利点となったかもしれない。

4.4 大学での人間関係

最後に、大学での人間関係と大学および学部への愛着との関係について分析をおこなう。学生が大学生活のなかで築いていく人間関係は、大きく学生同士の関係と教員との関係に分けられるだろう。他の学生や教員との人間関係に関する項目には、「大学では良い友人ができた」と「大学では良い先生にめぐりあえた」があった。前者は「友人との関係良好度」を、後者は「教員との関係良好度」をあらわすものである。

表 10 学生および教員との関係良好度ごとにみた大学・学部への愛着の平均

		大学への愛着			学部への愛着		
		平均	<i>n</i>	<i>F</i> 値	平均	<i>n</i>	<i>F</i> 値
友人との 関係良好度 (良い友人が できた)	そう思う	3.702	253	41.746 ***	3.7874	254	44.594 ***
	ややそう思う	3.097	62		3.0968	62	
	あまりそう思わない ・そう思わない	2.821	14		2.9286	14	
教員との 関係良好度 (良い先生に めぐりあえた)	そう思う	3.777	213	46.757 ***	3.8645	214	68.715 ***
	ややそう思う	3.182	88		3.3182	88	
	あまりそう思わない ・そう思わない	2.926	27		2.6296	27	
全体		3.547	330		3.6163	331	

*** <0.001

表 10 は、友人との関係良好度と教員との関係良好度別にみた、大学および学部への愛着の平均である³。表から、大学の友人と良好な関係をもつこと、また、教員と良好な関係をもつことが、学部および大学への愛着につながる事がわかる。集団の構成員との人間関係は、その集団への愛着の形成において重要な条件になる。集団内に自分と良好な関係をもつ人がいれば、その良好な関係性のために集団への愛着が強まる。逆に、集団内に自分と良好ではない関係にいる人がいれば、集団への愛着は弱くなる。大学内や学部内の良い他者関係が、大学および学部への愛着を高めるのである。

5 大学および学部への愛着の規定要因

5.1 学部への愛着の規定要因

これまで、入学前の要因と大学生活にかかわる要因が、大学および学部への愛着とどのように関連しているかを確認するために、平均の差を見たり相関分析をおこなったりしてきた。しかし、これらの要因は互いに関連しあう場合が多いため、2項目間の関係を分析するだけでは、大学および学部への愛着に直接影響する要因が何かは、わからない。したがって、ここからは大学への愛着と学部への愛着を従属変数にした重回帰分析をおこない、他の要因をコントロールした上での、各要因のもつ大学および学部への愛着に与える影響を確認していこう。

まず、学部への愛着の規定要因の分析をおこなう。

³ 「あまりそう思わない」「そう思わない」は、回答数が少なかったため、2つの回答を1つのカテゴリにまとめた。

表 11 学部への愛着の説明モデル (標準化回帰係数)

	モデル1	モデル2	モデル3
女性(男性:0)	0.054	-0.031	0.014
高校所在地(京都:0)			
京都を除く近畿地方	0.040	0.067	0.038
その他の地域	-0.023	0.009	0.022
入試形態(一般・センター:0)			
推薦	0.039	0.006	-0.020
内部推薦	0.127	0.117	0.104
第1志望以外(第1志望:0)	-0.035	-0.036	-0.077
浪人(現役:0)	0.045	0.018	0.097
学科(社会学科:0)			
社会福祉学		0.018	-0.023
メディア学(新聞学)		-0.098	-0.108
産業関係学		-0.095	-0.140 *
教育文化学(教育学)		-0.083	-0.026
5年以上(4年:0)		-0.195 **	-0.125 *
授業内の取り組み		0.016	-0.003
授業外の取り組み		0.062	-0.049
遅刻・欠席頻度		-0.089	-0.049
能力向上		0.246 ***	0.141 *
物事への理解の深まり		0.019	-0.044
GPA		0.043	0.048
部活・サークル活動		0.088	0.019
アルバイト		0.071	-0.053
就職活動		0.019	0.066
友人との関係良好度			0.155 **
教員との関係良好度			0.546 ***
R^2	0.027	0.181 ***	0.501 ***
調整済み R^2	0.004	0.112	0.454
n	306	271	268

* <0.05 ** <0.01 *** <0.001

表 11 は、学部への愛着を従属変数にしておこなった重回帰分析の結果である。入学前の要因だけを投入したモデル 1 では、統計的に有意な関連が見られなかった。また、モデルの決定係数も非常に低く、モデルの検定も有意ではない。2 項目間の分析 (表 3) では、性別、入試形態、志望順位が学部への愛着と関連していた。しかし、重回帰分析の結果から、これらの要因は学部への愛着を規定するといえるほどの影響をもたないことがわかる。

モデル 2 からは、在学年数が 5 年以上であることが、学部への愛着を弱める効果があることがわかる。また、授業にかかわる要因のなかで、学部への愛着を規定するものは、能力向上だけであることもわかる。能力向上以外の授業にかかわる他の要因も、2 項目間の分析 (表 8) では関連が見られていたが、ここでは関連が見られていない。しかし、金 (2010) からわかるように、授業内外の取り組みによって能力向上が得られる。授業内外の取り組み

みは、能力向上を媒介して学部への愛着につながるのだろう。また 2 項目間の分析で見られた物事への理解の深まりと学部への愛着との関連は、物事への理解の深まりが、能力向上と同様に授業への取り組みによって高められるために見られた擬似的な関連であると考えられる。課外活動の 3 要因は関連が見られなかった。

モデル 3 では、友人との関係良好度と教員との関係良好度が、学部への愛着を高めるといった関連が見られている。モデル 3 の決定係数を見ると、モデル 2 の決定係数より 2 倍以上高くなっている。このことから、他者関係が学部への愛着を規定する重要な要因であることがわかる。なかでも、教員との関係良好度の効果は 0.546 と非常に高い。学部への愛着の形成に最も大きい影響を与えるのは、教員との良好な関係なのである。なお、5 年以上ダミーと能力向上の効果もモデル 3 ではかなり減少している。このことから、4 年で卒業できた人や授業によって能力が向上した人は、友人や教員と良好な関係をもつことがうかがえる。

さらに、モデル 3 ではモデル 2 まで関連が見られなかった産業関係学科ダミーが負の効果をもつようになる。これは、産業関係学科に入学すると学部への愛着が弱くなるということの意味しているが、同時に、産業関係学科の人が他の学科の人より友人および教員と良好な関係を築いていると解釈することもできる。しかし、本稿の分析だけではその具体的な理由は解せない。このことを明らかにするには、稿を改めて分析する必要があるだろう。

5.2 大学への愛着の規定要因

次に、大学への愛着の規定要因について分析をおこなう。前述したように、学部への愛着も大学への愛着を規定する重要な要因の 1 つであると考えられる。したがって、ここでは学部への愛着も独立変数として投入することにする。大学への愛着を従属変数にした重回帰分析の結果は、表 12 に示されている。

表 12 大学への愛着の説明モデル (標準化回帰係数)

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4
女性(男性:0)	-0.019	-0.064	-0.033	-0.040
高校所在地(京都:0)				
京都を除く近畿地方	-0.005	-0.019	-0.057	-0.075
その他の地域	-0.062	-0.079	-0.067	-0.077
入試形態(一般・センター:0)				
推薦	0.158 **	0.106	0.085	0.094
内部推薦	0.210 *	0.182 *	0.173 *	0.125
第1志望以外(第1志望:0)	-0.024	-0.016	-0.047	-0.011
浪人(現役:0)	-0.008	-0.023	0.032	-0.013
学科(社会学科:0)				
社会福祉学		-0.007	-0.041	-0.031
メディア学(新聞学)		-0.006	-0.022	0.028
産業関係学		0.000	-0.030	0.035
教育文化学(教育学)		-0.046	0.000	0.012
5年以上(4年:0)		-0.092	-0.027	0.030
授業内の取り組み		0.016	0.018	0.019
授業外の取り組み		0.139 *	0.056	0.078
遅刻・欠席頻度		-0.100	-0.064	-0.042
能力向上		0.223 **	0.144 *	0.079
物事への理解の深まり		0.048	0.001	0.021
GPA		-0.026	-0.032	-0.054
部活・サークル活動		0.055	-0.013	-0.022
アルバイト		0.030	-0.064	-0.039
就職活動		0.013	0.037	0.007
友人との関係良好度			0.224 ***	0.152 **
教員との関係良好度			0.352 ***	0.101
学部への愛着				0.460 ***
R^2	0.074 **	0.203 ***	0.392 ***	0.498 ***
調整済み R^2	0.052	0.136	0.335	0.448
n	305	271	268	268

* <0.05 ** <0.01 *** <0.001

入学前の要因だけを投入したモデル1では、2項目間の分析(表3、表4)では関連が見られていた高校所在地、志望順位、現役・浪人のそれぞれのダミー変数の効果は見られず、入試形態のダミー変数である推薦ダミーと内部推薦ダミーだけが有意な正の効果をもつ。入学前の要因のなかで大学への愛着に直接影響するのは、入試形態だけなのである。2項目間の分析で見られた他の要因からの関連は、他の要因が入試形態と関連することから生じた擬似的なものであると考えられる。

モデル2では、授業外の取り組みと能力向上が大学への愛着を高める効果をもつことが示されている。また、モデル1では関連が見られていた推薦ダミーの効果が有意ではなくなっている。分析は省くが、推薦入試を通して入学した人は、他の人より授業に積極的に

取り組む傾向がある。モデル 1 の推薦の効果は、推薦入試の人のこういった傾向によってあらわれたものだろう。

モデル 3 では、友人および教員との関係良好度が大学への愛着を高めることがわかる。学部への愛着と同様に、教員との関係良好度が大学への愛着に与える効果が最も強くなっている。また、モデル 2 では効果をもっていた授業外の取り組みの影響が減り有意ではなくなるとともに、能力向上の効果も低くなっている。このようなモデル 2 の効果は、ゼミ発表や卒論などの準備などに積極的に取り組む人ほど、教員と良好な関係を形成するようになるために見られた効果であると考えられる。

モデル 4 は、モデル 3 に学部への愛着を加えて投入したものである。このモデル 4 とモデル 3 を比較することで、何が大学への愛着に直接影響し、何が学部への愛着を介して大学への愛着に影響するかが確認できる。表 2 の分析結果から十分予想できることだが、学部への愛着は大学への愛着への高い正の効果をもつ。また、モデル 4 では、モデル 3 において有意な効果をもっていた能力向上の影響が減り有意ではなくなっている。これは、能力向上が学部への愛着を高め、大学の愛着の向上につながるといった媒介関係にあることを示している。能力向上は、大学の愛着に直接には影響せず、間接に影響するのである。また、モデル 3 で 0.3 以上の高い値を示していた教員との関係良好度の効果がモデル 4 では減少し、有意ではなくなった。教員との良好な関係が学部への愛着を高め、それが大学への愛着につながるといった媒介関係があるのである。

6 考察とまとめ

以上の分析から、学部への愛着と大学への愛着を規定する要因が何か確認できた。最後に、学部への愛着と大学への愛着を規定する要因の共通点と差異点についてまとめておこう。まず、両方の愛着に同等の影響を与える要因には、友人との関係良好度があつた。大学内の良好な友人関係は、大学への愛着と学部への愛着に直接影響する要因なのである。学部への愛着にのみ影響する要因には、在学年数があつた。5 年以上在学することは、学部への愛着を弱めるが、大学への愛着とは関連しないのである。入試形態の違いは大学への愛着だけに影響を与えるようだ。一般試験やセンター試験による入試で入学した人より、推薦入試や内部進学で入学した人が高い大学への愛着をもつ。学部への愛着を媒介して大学への愛着に影響する要因には、能力向上と教員との関係良好度があつた。どちらの要因も学部への愛着を高め、それが大学への愛着の向上につながるといった間接的な関連をもつのである。

分析をおこなう前に、江口（2003）から得られた知見から、豊かな人間関係が大学および学部への愛着を高めると予想したが、これまでの分析結果からこの予想が正しかったことがわかる。大学内の友人や教員と良好な関係を形成することが、大学および学部への愛着を高めるのである。なかでも、教員との良好な関係は、学部への愛着を規定する最も重要な要因であり、大学への愛着においても学部への愛着を媒介して間接的ではあるがかな

り強い影響を与えることがわかった。学生が大学および学部への愛着を抱くには、なによりも教員との良好な関係を形成することが重要であるといえよう。

ところで、学生が考える良好な関係にある教員、すなわち良い先生とは、どのような人だろうか。

表 13 教員との関係良好度と学科教員の様子

	教員との関係良好度	
	相関係数	<i>n</i>
的確なアドバイスをくれる	0.586 ***	325
親身になって相談にのってくれる	0.569 ***	326
気軽に相談できる	0.526 ***	325
興味深い知識を教えてくれる	0.516 ***	325
学問の面白さを教えてくれる	0.496 ***	325
研究の厳しさを教えてくれる	0.344 ***	326

表 13 は、学科教員の様子と教員との関係良好度（「大学では良い先生にめぐりあえた」）との相関を示したものである。表では、すべての項目において相関が見られているが、なかでも「的確なアドバイスをくれる」「親身になって相談にのってくれる」「気軽に相談できる」の 3 つの項目が他の項目より高い相関を示している。これらの項目は、相談に応じてくれる先生かどうかに関する項目である。要するに、学生にとっての良い先生とは、個人の悩みを相談できるほど親密な関係にある先生なのである。教員が学生とより親密な関係を形成しようと努め、また、こうしたより親密な関係が形成できるような教育環境を作っていくことが、結果的には大学への愛着につながるといえよう。大学で教員によって支えられてきた経験のある卒業生が、今度は自分が大学を支えようとするのである。人に支えられてきたから、人を支えようとするのである。

[文献]

ベネッセ教育開発センター，2010，「特集 大学の財産という発想で築く卒業生とのパートナーシップ」『Between』2010年冬号（2013年2月25日取得，http://benesse.jp/berd/center/open/dai/between/2010/01/01toku_01.html）。

江口貴康，2003，「愛校心の形成要因——人間関係的要因を中心に」『社会システム論集：島根大学法文学部紀要社会システム学科編』8: 13-22.

金政芸，2010，「大学生の教育満足感と大学生活充実感を高める要因」『第1回 社会学部卒業生アンケート調査報告書』同志社大学 GP 評価委員会，13-25.

真鍋一史，1999，「ナショナル・アイデンティティの構造——ISSP 国際比較調査のデータ解析」『関西学院大学社会学部紀要』82: 145-56.